

地中海紀行(4) コートダジュールへの寄港

2023-6-29 池田良穂

スペインのバルセロナ港を出た後、「アンセム・オブ・ザ・シーズ」は東に針路をとり、フランス南部のビレフランシェという聞きなれない港に着きました。フランス南部の観光地として有名なコートダジュールの中心地ニースの東隣の小さな入り江にある村で、港の施設は小型船が着ける小さな栈橋だけでした。

小さな入り江の内には豪華ヨットが十数隻錨泊しており、その中央付近で「アンセム」は 180° 回頭して、船首を外海側に向けた姿勢で停泊しました。錨を下ろさずに、サイドスラスターとポッド推進器によるダイナミックポジショニングシステムで、横付けしたテンドー用のポンツーンが常に風下になるように姿勢を制御していました。したがって、他のアンカーを入れているヨットやモーターボートとは船首の方向が常に違っていました。クルーズ客船の技術も進んだものです。

地元との約束なのか、テンドーサービスには船のライフボートは使わずに、陸上から引いてきたポンツーンを2ヶ所の船側舷門に付けて、そこから乗客はボートに乗り込ませていました。ポンツーンのうち1隻は推進器をもたない箱舟で、もう一隻は操舵室もある船舶でした。なかなか効率的なテンドーサービスの方法と思っていたのですが、下船には意外に時間を要して、筆者が上陸できたのはテンドーサービスが始まってから3時間余りもたっていました。たぶんハードが悪かったわけでも、テンドーボートが少なかったわけでもなく、なかなかテンドーを出発させない運用が原因のようで、常にまわりには複数のテンドーボートが待機している状態でした。本船の運航士官のコントロールが悪いのか、フランスのボート会社との打ち合わせが悪いのかはわかりませんが、船上では上陸が遅くなった乗客からのクレームがたくさん聞かれました。

このような多少のトラブルはありましたが、上陸してみると坂道の多い町は、小さな路地がたくさんあり、その中に小さなカフェ、レストラン、ブティック、お土産屋などが点在するたのしい場所で、いかにも南仏のコートダジュールの一面といった雰囲気でした。

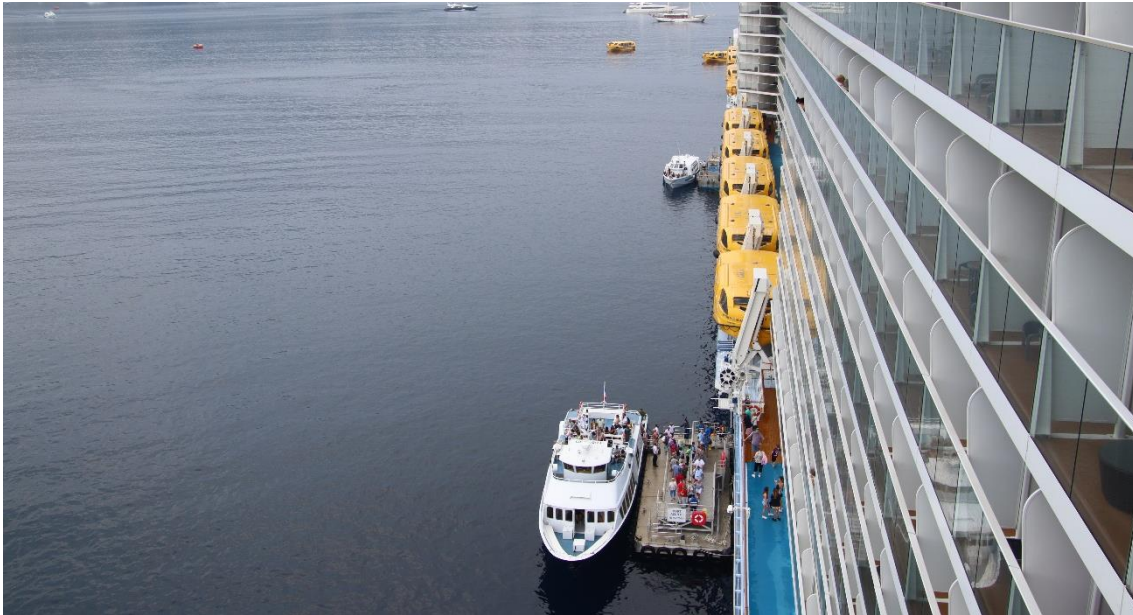
海岸のレストランで、魚介類の食事とワインを楽しみましたが、その味も満足できるものでした。ただし価格は結構高かったのですが、日本の物価が安すぎるための印象だったかもしれません。豪華ヨットでやってきて、食事を楽しむ人も多いようですので、高級な値段の高いレストランが多いのかもしれませんが、全食付のクルーズ客船に乗っていて、なんでもほぼ無料という生活を続けているため、金銭価格が少しマヒしているのかもしれませんが。

シップウォッチングを目的とする筆者にとっては、湾内に留まる豪華クルーザーや出入りする小型船を観ているのがとても楽しかったです。日本ではプレジャーボートの需要がなかなか伸びませんが、欧州のマリーナ文化の広がり背景には、こうして小型ボートで行く楽しい目的地がたくさんあることにもありそうです。これまでは小型ボートだけが訪れていた、こうした隠れ家的な場所に、大

型クルーズ客船がやってくるようになり、大量の観光客が大挙して訪れるようになったときの影響にも興味があります。



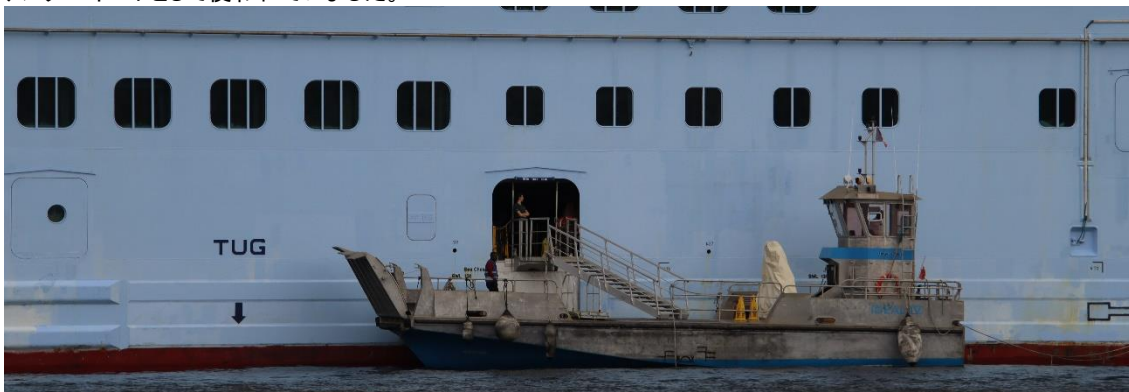
到着時に船上から見た入り江の中には、モータークルーザーやセーリングクルーザーがたくさん錨泊していました。



テンダーサービスが始まりました。2ヶ所にポンツーンを横付けて、乗客・乗員の乗下船を行いました。船のライフボートも2隻下ろされましたが、テンダーポートとしては使われませんでした。



ダイナミックポジショニングで姿勢を制御して沖泊をする「アンセム・オブ・ザ・シーズ」です。地元の小型船が6隻、テンダーボートとして使われていました。



乗客・乗員の乗り降りのためのポンツーンのうち1隻は自航のできるタイプの船でした。



小さな棧橋があるだけの港で、小型レジャーボートや、沖合に錨泊するヨットからのボートが繋がっていました。



村の中の坂道から入り江を望みました。綺麗でたのしい場所でした。



港の近くの海岸線に並ぶレストランでは、魚介料理をはじめとする料理が提供されていました。



出港時に、「アンセム」の船上から、2隻のポンツーンが繋がれて、港に戻って行くのが見えました。大型クルーズ客船の沖止めの誘致のために建造されたものなののでしょうか。